

〈事例論文〉

# イライラに振り回された男子高校生と母親の面接過程

## —エージェンシーを発揮するという—

A case study : the counseling process of a male high school student  
and his mother who were swayed by irritability —To show agency—

卒 田 卓 也<sup>1)</sup>

SOTTA, Takuya

### 要旨

自らの声を取り戻し、自らが選択しているという感覚はエージェンシー（国重，2013）と呼ばれている。ナラティブ・セラピーでは、カウンセラーが問題に対する方向性を定めるのではなく、当事者の選択を重視することにより、エージェンシーを発揮できるように支援するスタンスをとる。本事例では、計5回の面接過程を①「母子が何に困らされているかを知り母子で共働できる問題設定を模索する」、②「問題（「イライラ」）の外在化、問題からの影響を探る」、③「問題をコントロールできる、エージェンシーの発揮」の3期に分けて整理をし、エージェンシーを発揮していく変遷について報告する。ナラティブ・セラピーの姿勢は、人が内在化した問題に振り回されていた状態から、外在化された問題として扱えるようになることを支持する。そして、外在化した問題に対抗でき、その実感をもつことで、主体的に問題に対抗する気持ちが増幅し、エージェンシーを発揮することで事態は大きく変化していくといえるだろう。

キーワード：ナラティブ・セラピー、エージェンシー、外在化する会話、主体性、怒り

## I. はじめに

自らの声を取り戻し、自らが選択しているという感覚はエージェンシー（国重，2013）と呼ばれている。ナラティブ・セラピーでは、カウンセラーが問題に対する方向性を定めるのではなく、当事者の選択を重視することにより、エージェンシーを発揮できるように支援するスタンスをとる。本事例では、クライアントがエージェンシーを発揮するまでの変遷を報告する。

## II. 事例の概要

クライアント：母（44歳，自営業），長男 A（16歳，高校1年生）

家族構成：次女（12歳，小学6年生）の3人で同居。長女（25歳）は独立している。長男 A が3歳時に両親が離婚し，その後，A は父と会っていない。母と祖母は，自宅1階で飲食店を自営している。祖母の住居は別である。

臨床像：長男（以下 A）：176cm110kg。ラグビー部員や柔道部員のような骨太で大柄。黒の上着に，ゆったり目のスウェットパンツでラフな服装。話すスピードや動作はゆったりしている。

<sup>1)</sup> 近畿大学 心理臨床・教育相談センター 相談員  
Kindai University, Center for Clinical Psychology

母：中肉で小柄。ジャケットにパンツスーツの綺麗な服装で、少し色のついた眼鏡をかけている。椅子に浅く座って背筋を伸ばして姿勢よく話す。

**面接までの経緯と主訴：**通っていた地元の高校はやんちゃな子が多く、クラス内で誰かの悪口をよく聞き、自分も言われていた。x-1年の高校1年生の1学期からAが自分の部屋の壁を叩いたりするなどの攻撃性が出てきた。そして、x-1年9月から朝起きられず遅刻が増えた。母が無理やり起こそうとしたら、Aが母に殴りかかってきた。x-1年10月から週の半分以上欠席するようになり、x-1年10月中旬には全く登校しなくなった。夜中に何時間も壁を殴る音が家の中で響いていて、母として正直怖さを感じたし過食も増えてきたのでx-1年10月にG心療内科を受診したが医学的な問題はみられなかった。しかし母は、Aが小中学校時代に忘れ物が多く、整理整頓が苦手だったのでADHDを疑っている。Aのためにインターネットでいろいろなことを調べたりして奮闘してきたが、どうしたらよいか分からない。不登校については、母はAと相談して、通信制の高校（いくつかの候補の中でAが選んだ）に転校することに決めたので、Aの攻撃性についてどうしていったらよいのか相談したい。

**来談経緯：**G心療内科から当センターを紹介されて来談した。

**面接形態：**筆者（以下、Coと略記）は、母子同席面接（50分間）をX年1月～X年2月までの約2ヶ月間、計5回行った。途中、母だけで来談されたり、Aが一人での面接を希望したりした際には、それぞれの単独面接を実施し、それも計5回の回数に含んでいる。その後、経過観察としての面接を4度実施したが、事態が落ち着くまでの計5回に注目して報告する。

### Ⅲ. 面接経過

計5回の面接過程を①「母子が何に困らされているかを知り母子で共働できる問題設定を模索する」、②「問題（“イライラ”）の外在化、問題からの影響を探る」、③「問題をコントロールできる、エイジェンシーの発揮」の3期に分け、整理を行う。なお、Aの発言は「 」、母の発言は『 』、Coの発言は〈 〉内に記述する。

**第1期 母子が何に困らされているかを知り母子で共働できる問題設定を模索する**

**＃1～＃2：X年1月12日～X年1月23日**

＃1：母に連れられる形でAが来談し、Coの判断で、母とAの同席面接を実施した。Coの〈今日は、どういったことで来られたんですか？〉という質問に、母が積極的に乗り出してAの方を見てから語りだした。『高校に行き出して、1学期からAが辛そうにしている。』〈辛そうというのは、A君のどのようなところから辛そうだと思われたんですか？〉『ものすごく攻撃的になって。部屋の壁を叩いたり。』〈身体が大きいから、ものすごい力なんじゃないですか？〉とチラッとAの方を見ながら母に話しかけると、Aはニヤッと照れたような笑顔を返してくれる。〈穴とか空いたんじゃない？〉とAの方に向かって尋ねると「うん。空いてる。」と即答する。2学期に入ると、頭痛を訴えたり、朝起きなくなったりして、10月中旬から登校しなくなった。今は、通信の高校に転校して、昼間はパン屋でバイトをしている（x-1年12月から）。一緒に働いている人が良い人で楽しい。パンの仕込みなどをしている。〈ところで、学校に行きたくないなあと思わせたものって“何”だったんだろう？〉『友人関係やんね。』と母が答えたので、Coから〈A君は、どう？〉と促した。「小学校まではよかったけど。中学校で、2つの小学校が合わさって、それからかな。もう一つの学校の子は、悪い子が

多くて。で、高校になったら、さらに悪い子が多くて。誰かの悪口を言っていたり、自分も言われたりしたけど、それを見てるだけで嫌だったし。」と学校での嫌だった経験が語られた。すると母から、『思い返してみたら、小学校とか中学校とか、忘れ物が多いし、提出物も出さないし。家で机の上も整理整頓もできていないし。私が、横について一緒にやってあげたらよかったですけど。私も、ずっと仕事で。』と母がAに十分構ってあげられなかったことが語られた。Aが3歳の時に、夫と離婚したことも悪い影響を与えたと思っている。それで、Aが今のような状況になって、この子のために時間を作ってあげないといけなかった。インターネットでセロトニンを増やすにはどんな食事がよいか調べて食べさせたりして奮闘してきた（感情的に涙を流して話される）。〈今のような状況というのは？〉『地元の高校に行っていた時に、クラブ活動もしていたので、土日も学校に行っていたんです。疲れてたんだと思いますが、朝、起こしてもなかなか起きなくなってきた。でも、なんとか起こさないといけないし。それで、無理に揺さぶって起こした時に、私に殴りかかってきたんです。』〈ほうほう。それは、びっくりされたでしょう。〉『ほんとに。どうしたらいいかわからなくなって。でも祖母は神経質な人なんで、相談しても、いろいろ言われるし。』〈どんなことを言われそうなんでしょう？〉『私の子育てについてとか。自分としては、できることはやってきたし、全力投球してきたのに。否定されるようなことを言われたらと想像すると、相談もできないです。私も、疲れてきて、胃腸を悪くしたり、不整脈になったりして。』Aはバツが悪そうな表情をして母の語りを聞いている。〈A君、最近、怒ったり、キレたりすることはあった？〉「携帯でアニメを観ていて、その時に、家の通信環境が悪くて。』〈通信環境が悪いことが“イライラ”させてきたってこと？〉「はい。』〈その“イライラ”

は、どうやったら消えたの？〉「ラーメンを食べに行ったら。』『そうなんです。イライラした時とか、ラーメンを食べに行くって言って。それで車で連れて行くんです。』〈ラーメンを食べたら“イライラ”がどっかいったんだね。他には、“イライラ”がやってきたことはあった？〉「道で、知り合いに似ている人が居たら。』〈知り合いというのは？〉「昔の学校の時の。』〈いいイメージのない子と似ていたら？〉「はい。それで、帰って壁を殴りました。』〈ほう。じゃあ家まで、その“イライラ”をコントロールして抑え込むことができたっていうこと？〉「そういうことなのかな。』『でも、一回だったらいんですけど、そうじゃないんです。穴ボコだらけなんです。10月の時は、夜中の1時位から4時位まで、ずーっと壁を殴っていて。』〈えー、そんなに。びっくり。壁を殴っても殴っても、なかなか“イライラ”がどっかに行ってくれなかった？〉「はい。』〈手は大丈夫だった？〉「いや、痛かったです。』『音も大きいから。私も眠れないし。この子の部屋は3階なんですけど、外にも音が漏れていたみたいで、通報されてしまっ。』〈あら。ちなみに、その時の“イライラ”は、どこから来たの？〉「その時は、学校に行けなくなってきていた時で、でも部活だけ行ったりして。同じ部活の奴にも、いろいろ言われて。』〈授業に出てないのに、部活だけ来るってどうなのとか？〉「そう。そして、イライラして。その時は、学校の壁を殴りました。』〈殴ると“イライラ”がどうなるのかな？〉「殴ったら、落ち着くんです。後、何かを壊したり。』〈何かを壊すっていうのは、壁を殴る以外で？〉「おもちゃとか携帯電話とか壊したり。』『そうなんです。携帯も壊して。また新しく買って渡してますけど、“携帯は高いから、壊したら次は買えないよ”って言ってあります。』〈それからは、壊した？〉「いや、壊してない。』〈ほうほう、それは“イライラ”をなんとかコントロールできてるってこと？〉「そ

う。だから、壊れたテレビとか、壊していいものに当たるようにしてる。」〈なるほど。自分で、壊すものを選ぶことができるんだね〉「うん」

#2：母だけが来談する。Coから理由を尋ねると、昨日、Aが購入予約するつもののゲーム機を予約できなかったことが原因だと話す。母といくつかのゲーム店に行ったが、予約できなかった。すると、Aが「肉を食べないとおさまらない」と言ったので、ステーキ肉を5枚買ってあげた。その直前にも、ファミリーレストランで大盛りのパスタを二皿も食べて、気分が悪くなり吐きそうになっても、食べようとしていた。帰宅後もAの“イライラ”がおさまらず、次女が怖がっていると思い、母の布団で一緒に寝た。その様子を見ていたAが不機嫌そうにしていた。〈A君が自分のことを怖がっていると思ったから〉そうだと思う。昨日の段階では、「(パン屋の) 仕事やめてやる」とか「生きててもしんどい！首つりするから紐出してきて！」と言ってきた。『そんなものない』と言うと、それ以上は何も言ってこなかった。『息子が怖くて。体力的に怖いし。暴れて、次女に危害があるんじゃないかと思うと夜も眠れないんです。それで、昨日、H市に相談をしたら、H市の子ども家庭センターを紹介されて。今日、この後、連絡してみようと思ってるんです。そこでAを預ける施設があるかどうかとも聞きたいし。Aを家でみていくことが限界なんです。前に、受診した心療内科でADHDかどうか尋ねたけど、結局薬も出ないし、何もしてくれなかったから、どうしていったらいいか。』

Aの良いところについて尋ねる。バイトが終わったら、必ず電話して報告してくれること。でも、何をするにも、「お母さん、お母さん」なので、幼さが目立って、子どもっぽいと思う。〈何がA君を子どもっぽくさせているんでしょうか？〉何でしょうか。祖母からは、私が甘やかすからと言われる。Aが小さい時に、面

倒を見てあげられなかったので、今はAを最優先にして動いている。〈おばあちゃんの、Aを甘やかしているっていうのは、どういう関わりのことを言ってるんでしょう？〉私が『好き好き』とか言って頬擦りしたり、抱っこのように接したりしていることだと思う。勿論、3兄妹ともに同じ関わりをしている。Aも、そんなに嫌がっていないし、それでいいのかなあと考えている。他には、買いたいものとかをこれまでも比較的与えてきたと思う。それで、我慢する力を育んであげられなかったのかもしれない。でも、昔は、明るいし、ふざけて冗談を言ったり、みんなを笑わせるような子だった。離婚したり、うちの空気は重いから、明るくしなかったんだと思う。

第2期 問題（“イライラ”）の外在化、問題からの影響を探る

### #3：X年2月6日

#3：母子同席で入室。Aに向かって〈あれから“イライラ”が出てきた？〉と尋ねると「ありそうでないかな」『あれ話さないの？大発狂したやつ。』〈大発狂？“超イライラ”がやってきたということ？〉ゲームをしていて、自分が思っているより点数が低かった時に、「無性に東京に行きたくなって。』『東京行って、ゲーム作ったやつ、殺す！』って。私に“金寄せ”って言ってきて、怖くて4万円渡したら、本当に行こうとしたんです。』『でも、新幹線に乗ろうと駅に行ったら、駅員さんに“もう東京行きはない”と言われて、それで帰った。』〈それは大変だったね。でもその時の、“超イライラ”は、どうやって退治したの？〉「うーん。気づいたらどこか行った。」〈分からないけど、どこかに行った。ちょっと教えて欲しいんだけど、“イライラ”がやってきたら、他にどんなことで困られるの？〉「疲れること。』〈“イライラ”がA君を疲れさせるんだね。他には？〉「うーん。」〈お母さん、どうですか？〉『私は、心配して。』〈“イライラ”が



お母さんも心配させる。〉「うん」〈“イライラ”がA君を疲れさせたり、お母さんを心配させたり。“イライラ”からいろいろ迷惑をかけられてるんだね。〉『そうなんです。』〈どうかな。この“イライラ”をどう退治するか、一緒に考えない？〉「うん」〈お母さん、どうでしょう？ A君と一緒に退治する協力をしてくれませんか？〉『退治できるなら、勿論。』〈じゃあ、契約成立ですね。A君、これまでで“イライラ”を退治できたときってどんな時？食べたところに行ったら聞いてるけど、他には退治する方法はあるのかな？〉「うーん、どうだったかな。ゲーセンで音ゲー（リズムゲーム）したら、どこか行ったかな。そうそう。3月に、ゲーセンにあるみたいなコントローラーが家に届くんです。」〈おー、その本格的なコントローラーが“イライラ”を退治するのに、役に立つということだね。〉「うん」〈“イライラ”を退治して、振り回されたりしなくなったら、どんな良いことがあるかな？想像してみてください。〉「うーん」〈お母さんは？〉『私は、嬉しいし、笑顔になってるかな。』〈お母さんが笑顔になっている状況は、どう？ A君どんな気持ち？〉「えー、気持ち悪い。」と言いながら笑う。〈あんまり悪くないんじゃない？心配したり悲しんでいる時と比べるとどう？〉「それよりは、いいけど。」〈他には、どうかな？〉母が前のめりで協力的に『疲れにくくなったり。後、物壊したり、食べる量も減って、家のお金が貯まるんじゃない？』と話し、A君も「そっか。」と納得する。〈家のお金が貯まると、何か買ってもらえるかなあ〉「えっ、そうなん？」『そういうこともあるかも。』〈“イライラ”を退治すると、いろいろなメリットがあるかもしれないね。良いことづくめ。〉

第3期 問題をコントロールできる、エイジェンシーの発揮

■4～■5：X年2月13日～X年2月20日

■4：母子同席で入室。〈この一週間は、“イ

ライラ”がやってきた？〉「特に。嫌なことより、いいことがあったりして。」とAが話し出す。〈えっ！いいことって、どんなこと？〉「（パン屋のバイトで）窯の仕事を任されるようになって」〈おー、なんか凄そう！窯の仕事って、どんなことするの？〉「生地でこねたものを、窯に入れて。それで、タイマーで時間を計って。」〈ほうほう！やってみてどう？〉「今日からだったので、まだよく分からないけど。」〈そっかあ、これからなんだね。窯の仕事を任されたのは、どう？〉「嬉しかった。」〈嬉しいよね。お母さんから見て、どうですか？〉『この1週間は、壁をドンドンすることもなし、ほんとにいい状態だと思います。』〈“イライラ”がやってきていないんですね。〉『そうみたいです。』〈今の状況は、お母さんはどう思いますか？〉『もう嬉しいし、安心して。』〈“イライラ”がやってこない、こんなに安心するんですね。〉『はい。ほんと。今は、過食もないし。』〈“イライラ”がいないと、“過食”もいなくなった。〉『はい』〈A君、“イライラ”がやってきそうな時ってなかった？ A君の間を見て、意表をついてきたり、そういうことはなかった？〉「うん、なかったな。」〈そいつが出てこないようにしたんじゃない？何か工夫したんじゃない？〉「うん、疲れるようなゲームをしたり。疲れると“イライラ”はやってこないから、疲れるゲームをした。今日は、これから一人で話していいですか？」と唐突にAが単独面接を希望する。〈お母さんはどうですか？〉『いいですよ。』と母は別室にて待機してもらう。「一人の方が話しやすいし。」とアルバイトについて語る。店長は30歳位の女性で、いつもイライラしている。〈“イライラ”に乗っ取られている感じ〉「そうかも」将来について、パン職人も選択肢の一つと考えている。母からは、『やりたいことをやって欲しい』と言われている。アルバイトでは、5～6人の職場で笑えることが多いし楽しい。ミスをして、怒るというより、

注意だけだし、みんな優しい。〈さっき、お母さんが居て話せなかったことはある？〉「うーん、特にないかな。」面接後、母から『どうでした？』とCoに尋ねられ、〈たくさん話していましたよ。〉と返答すると、『本当に感謝しております。こんなに変わるとは。』とAの変化について実感をもっておられるようだった。

※5：母子同席で入室。Aからパン屋のアルバイトの話題が自発的に語られる。「今日から、窯の担当に正式になって。」〈正式についているのは？〉「前は、生地をこねたりとかもしていて、今日から、窯だけの担当になって。」〈おー、すごい。パンを作る工程の大事なところだよね？〉「うん。」〈そこまでみんなが作ってきた最後の工程。〉「うん。」〈すごいところ任されるよね？〉「そうなのかな。まあ、男だから。」〈男だから？〉「女の人だったら、生地をこねたりするだけだったり。自分は、窯の鉄板を持ち上げて運んだりもしないといけないし。」〈力持ちだから頼られてるのかな？〉「うん。」〈ところで、“イライラ”はやってきた？〉「えー、どうだったかな。覚えてないかな。」〈お母さん、どうでした？ A君に“イライラ”がやってきて、とりついてる時ってありました？〉『不機嫌なのかなと思う事はあっても、前みたいに乗っ取られているようなことはなかったですね。』〈ほうほう、乗っ取られなくなった。A君、乗っ取られなくなったのは、何かしたのかな？ “イライラ”がやってきても、振り回されなくていいようにしていることとか。〉「特に。えー、何かしたかなあ。』『仕事も集中してしてるみたいですし、寄せ付けなくなったんじゃない？』「そうかなあ。」今日は、朝7時から13時まで働いてきた。朝は、6時半に起きている。職場では人間関係もいいし、仕事に集中できている。〈将来もパン屋の仕事をしてもいいって言ってたけど、今はどう？〉「うん、でも最初は器材とかいろいろとお金がかかるし、大変かも。」〈へっ？自分の店を持つってこと？〉「あ

あ、へっ、そうか。(Coはパン屋に勤務するという意図で質問したが、Aは自営すると勘違いする)』『おばあちゃんが話してたけど、“今の店(母と祖母が自営している飲食店)は私の代でたたむから、Aにその後、改装してパン屋をしないかなあ”って言ってたよ。』『本当？(Aの目が輝く)』〈おおー、どう？今の話聞いて。〉「まあ、いいと思う。」〈何だか素っ気なく聞こえる〉「うーん、これから何か別のしたいことを考えても、いい方向に行くとは限らないし、まあパン屋でいいかなって。」〈お母さん、どうですか？〉『今決めなくても、いいと思いますし、またやりたいことがでてくるかもしれないし。』『パン屋でいい。』〈パン屋でいい？パン屋がいい？〉「パン屋がいい」〈パン屋がいい。どんなパン屋にしよう？〉「どんなのがいいかな。』『今の働いている店とか、見てみたら？焼くところ以外にも、どんなところに気を遣ってるとか。別のパン屋のパンを食べたりして、自分の好きなパンを見つけてみたり。』〈それ、いいですね。楽しそう。〉「うん。パンは、チーズが多いのがいい。でも、他の人はチーズが多すぎても嫌かも。』『でも、そういう特徴があるのが流行るかも。』『そういうものなのかな。』『今は、勉強やからいろいろやってみたらいいよ。』『うん』〈どんな店の名前にしようか？〉「店名が“なし”とか。そういうのが流行ったりすると思う。」〈店名“なし”。知る人ぞ知って感じかな？〉「うん。でも、宣伝はした方がいいと思うけど。」〈なるほど。でも、一年前位とか、パン屋になりたいと思うなんて、想像もしなかったんじゃない？〉『ほんとだね。』(A照れながら笑顔)『だから、以前は高校だけは卒業して欲しいという気持ちがありましたけど、今はそこまで拘らなくなってますね。』〈お母さんが、A君に高校は出て欲しいというメッセージは伝わってた？〉「うん、まあ。その方がいいんだろうって。』『そういうのも、Aが自分で決められたらって。』〈A君が自分の判断で選ぶことを

任せたということですか?』『はい』〈A君どう? 任された気分は?〉「悪くないかな。」

『最近、話す機会も増えたし。前は、“イライラ”に取りつかれているから、こっちからも怖くて話せなくて。』〈“イライラ”が親子の関係にも邪魔をしに來たわけですね?〉『そういうことです。』〈でも、どうして“イライラ”がやってきて取りつかなくなったんだろうね? A君、何かしたんじゃない?〉「どうなのかなあ。』『最近、自然に笑っていることも多くて。楽しそうに。』〈楽しくしていると、“イライラ”が近づいてこれないのかな?〉「そうかも。』〈それに、A君も仕事で自信がついてきて、“イライラ”が近づけなくなってるんじゃない?〉『それは大きいと思います。こんなに仕事に集中するなんて思いませんでした。朝も早いのに、私だったら無理ですよ。』〈僕も無理かもしれません(笑) どうやって早起きしてるの?〉「昔だったら、遠足とか、絶対遅刻出来ないじゃないですか? そういう時には、寝る前に、遠足を想像したら、早く起きられたから。今は、パンのレシピを見ながら寝るようにして。遅刻するのって怖いし。』〈もうプロミたい。』『ほんとですね。』

今後について。〈今、“イライラ”を寄せ付けなかったり、コントロールできるようになってきているように見えるんだけど、今後は、ここでお手伝いできることとして何があるかな? 定期的に、様子を見ながら、少しずつ話す間隔を空けていくのはどうかな?〉『そうですね。どう?』「うん、それで。」その後、経過観察のための面接を4回実施したが、特に問題が見られなかった。最終的な目標は、“イライラ”を完全になくすというよりも、“イライラ”はやってくるものなので、やってきた時にどう対処するかについての検討に変化していった。

#### IV. 考察

第1期では、積極的な母の語りの中に埋もれ

そうなAの語りを拾い、その中で母とAが共闘できる面接の目標とはどういったものかを想像しながら面接を行った。母子同席の面接形態を選択したのは、いわゆる問題が社会的に構成されているという社会構成主義の背景をもつナラティブ・セラピーにおいて、家族の成員を含めて面接していくことは、家族とともに問題を外在化することでAに問題の責任を押し付けず、Aの積極的な面接の参加につながると考えたからである。当初の不登校の問題については、通信制に転校したことで一先ずは様子見となったが、母がAの攻撃性に手を焼いており、A自身に困り感はないという構図が見られた。今の問題に対する母子の関係性では、母がAを何とか変えようと奮闘すればするほど、母からの干渉を回避したいAは、母に自分は困っていないというような振る舞いを日常的にするようになるかもしれない。#2でAが来談しなかったのは、そのことを示唆しているといえるだろう。そして、母はAの内面にさらなる問題提起していき、Aは母に責められているという気持ちから自身の無力感や苛立ちを増幅させていくといった悪循環に陥っていくと考えられる。

第2期では、1期で得られた情報をもとに、「人も人間関係も問題ではない。むしろ、問題が問題となる。つまり、問題に対する人の関係が問題なのである」(White & Epston, 1990)という視点で、“外在化する会話”を積極的に使用し、問題をAの内面から引き離すことを行った。それまでは、Aの攻撃性は、母の手におえず、ADHDやセロトニン仮説によるものというストーリーに当てはめて扱われていたが、#2で語られた『昔は、明るいし、ふざけて冗談を言ったり、みんなを笑わせるような子だった。』といったAの家庭内での生き生きとした姿からは、Aが“イライラ”を自ら選んだとは理解し難いし、Aに対して『どうしてイライラするの?』といったスタンスや問いかけは、A

の攻撃性をより増幅する言葉になるといえよう。そうならないために、“外在化する会話”でA自身も“イライラ”に困らされている人として捉え、母とA、Coが共闘できるスタンスをとった。具体的には〈あれから“イライラ”が出てきた?〉(＃3)というように“イライラ”が外からやってきたものとして質問し、“イライラ”から受ける影響については、〈“イライラ”で他にどんなことで困らされるの?〉(＃3)と尋ねていった。そして、〈“イライラ”がお母さんも心配させる。〉「うん。」〈“イライラ”がA君を疲れさせたり、お母さんを心配させたり。“イライラ”から色んな迷惑をかけられてるんだね。〉(＃3)というまとめにつながった。この共闘できる視点で〈どうかな。この“イライラ”をどう退治するか、一緒に考えない?〉「うん」〈お母さん、どうでしょう? A君と一緒に退治する協力をしてくれませんか?〉『退治できるなら、勿論。』という面接における共通目標を設定することができた。さらには、“イライラ”を退治した際の、家庭の状況や自身のメリットについても想像されるに至り、これまでAに内在化されていた取り扱い不能の攻撃性から、外からやってきた“イライラ”という外在化した問題に視点をシフトすることができた。

第3期では、早速、“イライラ”に囚われていない日常やアルバイトで活躍しているストーリーがAの口から積極的に語られた。また一方で、〈そいつが出てこないようにしたんじゃない? 何か工夫したんじゃない?〉(＃4)というようにAが主体的に“イライラ”に対抗している構図を意識して質問を行っていった。その後、“イライラ”が出てきたようだが、母が『不機嫌やなあと思う事はあっても、前みたいに乗っ取られているようなことはなかったですね。』(＃5)というように、Aが取り扱い可能な“イライラ”になっていったと考えられる。また、＃4でAが一人での面接を希望したが、

内容的には母が居ると話しにくいというものはなかった。このことは、Aが一人で物事に対処したい、自分だけで大丈夫という自立心が芽生えたことを示唆していたのではないかと考える。また、Aのアルバイトでの活躍や進路の方向性が見えて、それをできる限り想像し語ってもらい、母やCoが評価することで、Aの仕事での自信や、母のAへの信頼度が高まり、“イライラ”のコントロールにも寄与したといえよう。さらに、これまでAに内在化されていた問題について、外在化した視点で母から見てもらったという体験はAの無力感や自責感を下げることに大きく作用しただろう。そして、自らが問題に対してどのような関係でいたいのかということについても主体的に選択できるエイジェンシーの発揮につながったと考える。

## V. おわりに

Monkら(1997)は、『クライアント自身の声で語られた物語は、その人に代わってその人生が語られた物語よりもずっと有効であることがわかっている』と説明している。ナラティヴ・セラピーの姿勢は、人が内在化した問題に振り回されていた状態から、外在化された問題として扱えるようになることを支持する。そして、外在化した問題に対抗でき、その実感をもつことは、クライアント自身が主体的に問題に対抗する気持ちを増幅し、エイジェンシーを発揮することで事態は大きく変化していくといえるだろう。

## 謝 辞

本事例の報告を承諾してくださったAさんとお母様に心より感謝申し上げます。



## 引用文献

- 国重浩一 (2013) ナラティブ・セラピーの会話  
術 ディスコースとエイジェンシーという  
視点 金子書房
- Monk, G. D., Winslade, J., Crocket, K. & Epston,  
D.(Eds. )(1997) Narrative therapy in  
Practice ; The archaeology of hope. New  
York : John Wiley & Sons. (国重浩一・  
バーナード紫訳(2008) ナラティブ・アプ  
ローチの理論から実践まで：希望を掘りあ  
てる考古学. 北大路書房)
- White, M. & Epston, D.(1990) Narrative means  
to therapeutic ends. New York : W. W  
Norton & Company. (小森康永訳(1992)  
物語としての家族. 金剛出版)